

旺文社文庫

若草物語

オールコット著
恩地三保子訳



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであらう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

あなみ ちか

【編集顧問】
(五十音順)

亀井勝一郎 茅 誠 司 木村 毅
塩田良平 中島健蔵 森戸辰男

旺文社文庫 若 草 物 語 220円



昭和41年6月20日 初版印刷
昭和41年7月15日 初版発行
訳 者 恩 地 三 保 子
発 行 者 鳥 居 正 博
印 刷 所 旺文社専属 日新印刷株式会社

発 行 所 株式会社 旺 文 社
東 京 都 新 宿 区 横 寺 町
電 話 (269) - 2111 (大代表)

(許可なしに転載、複製することを禁じます) 5N74-5-6,9 © 恩地三保子 1966

旺文社文庫

若草物語

オールコット著
恩地三栄子訳

旺文社

目 次

序	第一章	第二章	第三章	第四章	第五章	第六章	第七章	第八章	第九章	第十章	第十一章	第十二章	第十三章	第十四章	第十五章
	天国遍路	メリー・クリスマス	ローレンス家の男の子	重 荷	近所づきあい	ベスの「美の宮殿」発見	エイミーの「屈辱の谷」	ジョオ「底なし穴の魔王」に逢う	メグ「虚栄の市」へ行く	P・Cと P・O	実 験	ローレンス陣地	空に描いた城	秘 密	電 報

二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

第十六章 手紙

第十七章 誠実なるもの

第十八章 暗い日々

第十九章 エイミーの遺言状

第二十章 内緒話

第二十一章 ローリーわるさをしジョオこれを取りなす

第二十二章 楽しきまきば

第二十三章 マーチ伯母のお手柄

解説

少女時代への郷愁

年譜

あとがき

恩地三保子
おんちみほこ
岸田稔子
きしだのりこ

挿絵
原書より転載

二〇四

二〇三

二〇二

二〇一

二〇〇

一九九

一九八

一九七

一九六

一九五

一九四

一九三

一九二

一九一

序

行け、わが小さき書、行きて示せ
汝が胸に収めし秘事のすべて
汝を迎え称えん者みなに。

願え、汝が示せしものの

善に生く術とあがめられんを。

祈れ、また、良き遍路となり

われらを超えゆかんことを

また告げよ、「慈悲」の名を

疾くその遍路の道を行きし者と。

教えよ、若き乙女が胸に

神のみ国のみ栄えを。

聖なるみ跡を踏みゆけば

いと足弱き乙女子も

やがて至らん その果てに

神のかんばせ仰ぐまで

第一章 天国通路

「プレゼントぬきのクリスマスなんて、およそ考えられないな」炉端ろばたの敷物に寝そべったジョオは、不平たらたらの声で言った。

「貧乏びんぼうって、ほんとにいやなものねえ」メグは、着古した服に目をやり、溜息ためいきをついた。

「すてきなものを、たくさん持っている女の子もいるのに、なんにもない子もあるなんて、あんまり不公平すぎるわ」まだ小さいエイミーまでが、いじめられっ子のようにクスクス鼻をならした。

「でも、あたしたちには、おとうさまとおかあさまと、それに、こんなにいいきょうだいがあつてよ」いつもの場所から、ベスがおっとり口をいれた。

炉ろの火を映した四つの若々しい顔が、そのあかるいことばにぱっと一瞬輝いたのに、すぐまた暗くかげてしまった。ジョオが悲しいことを言ったからだ。

「おとうさまはいらっしゃらないわ。それも、これから先ながいこと」

ジョオは「たぶん、永久に」とは言わなかったが、みんなそれぞれ、遠い戦場の父親を思いながら、そっと胸につぶやいたのだった。

しばらく、みなだまりこくっていた。と、メグが、気分をかえるように、調子を変えて話した。

「みんな、わかってるわね、なぜおかあさまが、今年のクリスマスはプレゼントなしにしよう

おっしゃったか。この冬は、何もかもたいへんで、みんなにとってつらい冬になりそうだからなのよ。それに、兵隊さんが戦地で苦勞していらっしゃるのに、自分のたのしみにだけ、お金をつかってはいけないと思っておいでだからだわ。あたしたち、どうせ、たいしたことはできやしないけれど、ちいさな犠牲をはらうくらいのことはできるし、喜んでそうするべきなのね。でも、ほんとのことを言うと、あたしにはそれができそうもないの」

メグは頭をふった。前からほしかった、きれいなものが、つぎつぎと目の前に浮かんで、まだあきらめきれないのだ。

「でも、あたしたちが使うくらいのお金なんか、たいしたことないと思うんだけどな。みんな一ドルずつもってるけど、それを献金したところで、軍の財政が助かるってわけじゃないもの。おかあさまやみんなからプレゼントをもらおうなんて思っ
(3) てないけど、〃オンディーヌとシントラム〃だけは自分で買いたいんだ。ずっと前から、ほしくてたまらなかったんだもの」ジヨオは本の虫なのだ。

「あたしは、自分のお金では楽譜をかうつもりだったのよ」ベスはそう言って溜息をついた。炉刷毛と湯沸台にしかきこえないほどかすかではあったが。

「あたし、フェイバー印の色鉛筆買うんだわ。どうしても必要なんですもの、だって」エイミーまでが大決心をしている。

「おかあさまは、あたしたちのお金のことは、なんにもおっしゃらなかったし、まさか何もかも

(1) 約三六〇円。

(2) ドイツのフーケ(一七七七―一八四三)の作品。

あきらめさせようと思っていらっしゃるわけじゃないでしょうよ。みんな、それぞれほしい物を買うことにしよう。すこしは気晴らしもしなけりや。われわれだってずいぶんいっしょうけんめい働いたんだもの」ジヨオは、男の人のように足をかかえこんで靴の踵のへり具合を調べるふりなどして、こう叫んだ。

「そうよ、あたしは働いたわ、たしかに——。手に負えない子どもたちを、一日中教えなけりやならないんですものね。家へすぐにもとんで帰って、あれもしたいこれもしたいと思いがらも」メグはまた不平がましい口調になる。

「それだって、あたしにくらべれば、まだまだ上等の部類」ジヨオは言う。「考えてもみてよ、小うるさいいらしたばあさんとさし向かいで、何時間も家の中に閉じこめられて、ああでもないこうでもないで、コマネズミみたいに追いまわされて。いつでもやりきれなくなつて、窓からとびだすか、思いっきりわめきたくなるんだから」

「こんな愚痴はこぼしたくないけれど、でも、台所のおかたづけや家の中の整頓なんて、世の中でいちばんいやな仕事だと思ふんだわ。そのせいで、なんとなくいらしてくるし、指が荒れてこわばるもので、ピアノの練習もうまくいかないわ」ベスは荒れた手に目をおとし、こんどはみんなに聞こえるほどの吐息をついた。

「おねえさまたち、でも、あたしほどつらくはないとおもうわ」エイミーが声をあげた。「だって、いじわるっ子がいる学校へ行かないでいいんですもの。あの人たちったら、時間中には、勉強がわからないっていじわるするし、あたしの服をおかしがってはやすし、おとうさまがお金持ちでない

と「レッテルを貼^はったり鼻^{はな}がすてきじゃないからってからかったりするのよ」

「その「レッテルを貼る」って「誹^ひ謗^{ぼう}する」のおまじがいのようね。ピクルスの瓶^{びん}じゃあるまいし、パパにレッテルなんか貼らないでよ」ジヨオは笑いながら教えてやった。

「ちゃんとわかっててよ。そんなにひく^{ひく}にるものじゃないわ。上等なことをつかって「用語域」を増すのは、たいへんいいことですわよ」エイミーは胸をそらしてやりかえした。

「さあさあ、ちびさんたち、突^つ、つ、つ、こはやめて。ねえ、ジヨオ、あたしたちが子どものころ、パパがおなくになったお金がいまあったらいいとおもわないこと？ ああ！ 心配ごとが何もなかったら、どんなに楽しくすばらしいでしょうね」暮^くらし向きのよかったころをおぼえているメグが言う。

「あら、この間、おねえさん言ったじゃないの——キング家の子どもたちよりあたしたちのほうがずっと幸^{しあわせ}せだって。あんなにお金があっても、あの人たちは喧嘩^{けんか}ばかりしていて、始終^{しじゅう}不平を言ってるって」

「そう、言ったわ、たしかに、ベス。まあそう言えばそうね。そりゃあ、あたしたち働かなければならないけれど、それぞれ楽しいこともあるし、ジヨオに言わせれば「ちよいと愉快^{ゆかい}なお仲間^{ななかま}」だから」

「ジヨオねえさんて、いやだわ、下品なことばばかりつかって」長々と寝そべっているジヨオ

(1) table 商標をはる。(2) libel のしる。(3) つけもの。(4) 「皮肉る」というべきところを satirical
 といいちがえている。

の姿を、エイミーは眉をしかめて見ながら、もっともらしく批判した。ジョオは、とたんにパツと立ちあがり、ポケットに両手をつっこんで、口笛を吹き始めた。

「やめてよ。まるで男の子みたい」

「それがねらいさ」

「乱暴で、レディーらしくないひと、あたし大きらいだわ」

「こっちは、こまっちゃくれの、おきどりむすめなんかごめんだ」

「＃ちいさな巣の中で

なかよしこよしの小鳥さん＃」

仲裁役をいつも買ってでるベスが、おどけた顔をしてみせて歌いだすと、いがみあっていた二人もつい笑いだし、突っつきっこも今回はこれまでということになった。

「まったく、あなたたちったら、二人ともよくないのよ」メグは、例によって、ねえさんぶった説教口調になる。「ジョセフィン、あなた、もう子どもじゃないんだから、男の子スタイルはいいかげんにして、もっとおしとやかにしたらどうなの。そりゃあ、まだ小さい間は、誰も気にしなかったわよ、でも、そんなに背がのびて、髪だってあげてるんでしょ。もう一人前のレディーだっ

こと忘れちゃいけないわ」

「レディーなんて、ごめんだわ。髪をあげたらそうなるのなら、二十歳になるまで三つ編みにしてぶらさげとくからいい」ジョオは、髪にかけたネットを手荒くはずすと、さっと頭をふって栗色の毛を肩にさばきちらした。

「いやでもいつかは大人おとなになって、ミス・マーチだなんて名乗って、裾すそをゾロゾロひいた服を着こんで、エゾギクみたいにすまし返ってなけりゃならないかと思うと、ほんとにぞっとしちゃう。だいたい、あたしは、男の子の遊びだの仕事だのしぐさだのほうがびったりくるのに、女の子に生まれついたのが間違いなよ。なぜ男に生まれてこなかったか、今までもくやしくてたまらなかったけど、今こそそれが残念しだ至極ごくってとこよ。だって、男なら、戦地へ行って、パパといっしょに戦えるのに、こうして家の中にくすぶって、編物なんかしてなけりゃならないなんて、もうろく婆ばあさんじゃあるまいし！」

シヨオは、軍隊用の紺色こんいろの靴下をふりまわす。その勢いに編棒はカスタネットのように鳴り、はずみで毛糸の玉が向こうの壁までころがっていった。

「かわいそうに、シヨオねえさん。でも、こればかりはしかたがないわ。せめて名前を男の子みたいに呼んでもらって、あたしたちにおにいさんぶるくらいでがまんしてちょうだいな」

ベスは、自分の膝ひざのそばにあったシヨオのかたい髪をやさしくなでてやる。どんなに皿洗いが多かろうと、掃除に追われようと、ベスの指は、けっしてこのやさしさを失うことはないだろう。

「エイミー、あなたはね」メグのお説教はつづく。「口うるさすぎるし、しゃっちょばりすぎるわ。まだ年が小さいから、お上品ぶってもご愛嬌あいきょうですむけれど、そろそろ気をつけないと、それこそ、鼻もちならないガチョウさんになりますよ。お行儀ぎやうぎがよくて、ことばがいいのはまことにけっこうよ、ただし、妙にきどらない時のこと——あなたのつかう変へんてこな単語たんごったら、シヨオの俗語しやくごといい勝負しやうぶだわ」

「ジョオがおてんばさんで、エイミーがガチョウさんだとすると、あたしはなにかしら？」ベスは、自分も二人といっしょにお説教を聞く気なのだ。

「あなたは、いい子ちゃん、それだけ」メグはやさしく答えた。これにはあとの二人も異議なしだった。「コネズミちゃん」と綽名あだなされているベスは、家中のベツトなのだ。

みなさん、もうきつと、登場人物がどんな様子をしているか、見たくてたまらなくおなりでしょう。ここで少々時間をさいて、四姉妹のかんたんなスケッチをお見せすることにします。外には十二月の雪が、音もなく降りしきっています。部屋の中には、炉ろの火がパチパチ陽気にはぜ、四人は、夕べのほのあかりの中で、しきりに編物の手を動かしています。この古びた部屋は、絨氈じゅうたんはだいぶ色あせ、家具などもごく質素ながら、あたたかい気分には満ちた、くつろぎの場です。壁には、それぞれ、いい画が一、二枚、造りつけの棚たなには本がぎっしり、クリスマスローズの紫と黄色の菊が窓べを飾り、家庭のやすらぎとでもいった雰囲気ふんいきが、すべてをゆったり包んでいました。

長女のマーガレットは十六歳です。色が白く、ふんわりとした肉づきの、柔らかな茶の髪もゆたかに、ぱっちりした瞳ひとみ、甘やかなくちもとの美しい娘で、ことに、その真白な手は、彼女自身、内心こころご自慢じまんなのでした。

十五歳のジョオは、背がむやみに高く、やせっぽちで、肌はだは鰯色いわしいろ。なんだか、威勢いきせいのいい若駒わかごまを思いださせるような少女でした。それというのも、ジョオは、長すぎる手足が何をするにも邪魔じやまっけでたまらぬというように、うまく持てあつかいかねて弱っているように見えるからです。一文字

にひき結んだ唇、ちょっと反った鼻、そして、灰色の瞳は、何もかも見落とすまいというように鋭く、めまぐるしく表情が変わります。激しいかと思うと、ふっとおどけ、つぎには何か思いつめたように。長いたっぷりした髪は、たぶん唯一の取得なのに、これが邪魔つけとみえ、いつもネットの中にまるめこんでいます。猫背で、手足が大きく、いつも服が身につかず、それに、日増しに大人になっていく自分のからだつきが、なんとも氣にくわぬという年ごろの女の子特有の、妙にぎこちない様子をしているのです。

エリザベス、もしくは、みんなの呼び名のベスは、バラ色の肌をした、絹のような髪、瞳の美しい十三歳の少女で、はにかんだ物腰をし、物を言うのもひかえめで、めったなことでは乱されないう、安らかな表情をしています。父親は、ベスを「平安嬢」と呼んでいましたが、その綽名はじつにぴったりでした。彼女は、自分でつくりだした、幸せな世界に住み、自分が信頼でき、愛しているごく少数の人たちに逢いだけに、そこから出てくるような子なのです。

エイミーは、いちばん下ですが、なかなか重要な人物です——少なくとも自分の意見では。典型的な白雪姫タイプで、目はあおく、金髪が肩に波うち、血の気がうすくほっそりしていて、作法にはずれまいとする年若なレディーよろしく、いつもひとりですましている子でした。

さて、この四人の姉妹の性格については、みなさん方ご自身、おいおい近づきになっていただくことにしましょう。

時計が六時を打った。炉の火をかきたてて、ベスが、一足の上履をそろえてあたためにかかっ

た。この古びた上履は、姉妹の気分を一新する効果をあげたようだった。そろそろ母親が帰る時間なので、みんなの心がそわそわと浮きたってきたのだ。メグはお説教をやめ、ランプをつけ、エイミーは、今まで占領していた安楽椅子を、誰にも言われないのに立ち、ジョオも、疲れきっていたのを忘れ、床から起きあがって、上履がよくあたたまるように、火のそばに立てなおしたりした。

「ずいぶんぼろだな。ママ、新調するべきよ」

「あたし、自分の一ドルでお贈りするつもりだったのよ」とベス。

「あら、あたしが、よ」エイミーが大声をあげる。

「最年長はわたくしでございましてよ、だから」メグが言いだすと、すぐジョオが割りこみ、有無を言わさぬ調子でまくしたてる。「パパがお留守中の今は、あたしが家の男性役よ。だから上履も、このあたしが買うわ。パパは、留守中ママのことはくれぐれも頼んだよ、っておっしゃったもの」

「ねえ、こうしましうよ」とベス。「クリスマスには、みんなそれぞれ何かママにさしあげて、自分のためには何も買わないの」

「それでこそベスよ、すてき！　で、何がいいかな？」ジョオが叫んだ。

四人が、真剣な顔つきで考えこむ。と、メグが、自分のきれいな手からヒントを得でもしたように発表した。「あたしは、すてきな手袋にするわ」

「軍隊用上履、これこそ最適よ」ジョオが叫ぶ。

「ハンカチにするわ、縁かざりのついた」とベス。